

Ome traditional wooden townhouse

繋がる町屋の集合住宅



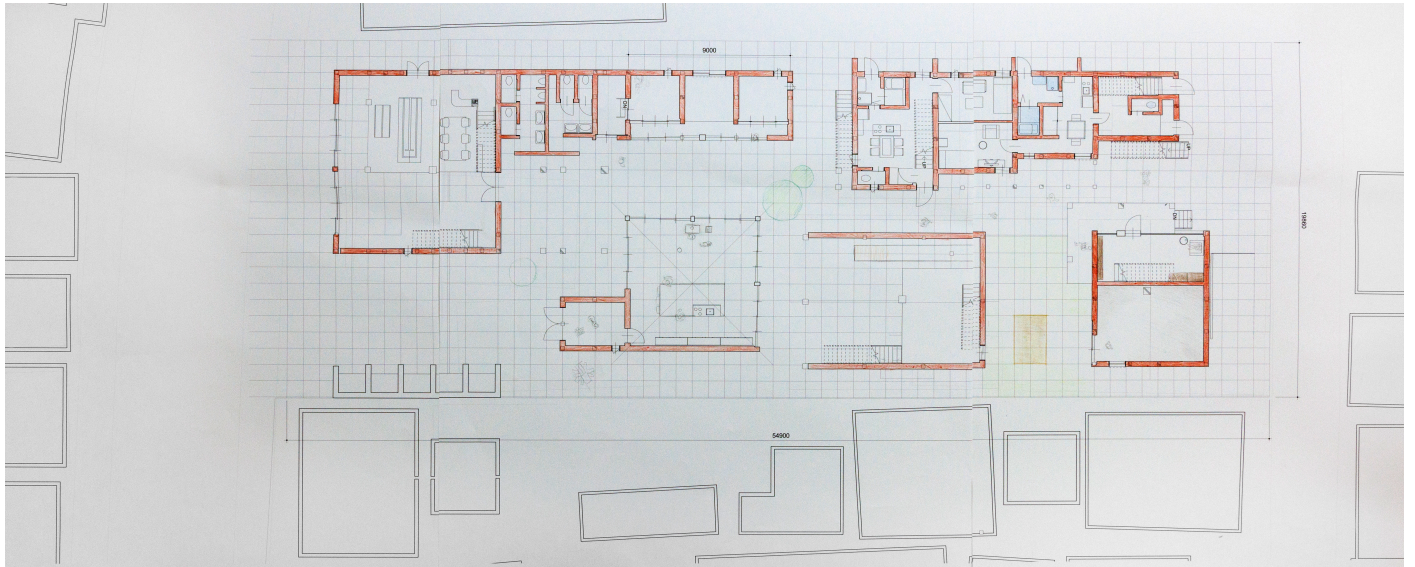
檜山 祐果
建築設計計画I 研究室

□コンセプト

これからの住まいのあり方として、小人数世帯を繋ぐストーブ付きの集合住宅を作った。オープンキッチンに薪ストーブがあり、各家庭にペレットストーブを設けた。また、森林組合と協力し木材と薪の調達をし、そこから出た木片をペレットとして活用、ストーブから出た灰は農園や雪かきに使い無駄なく使っていく。青梅市の町屋を参考に1階2階の比率を合わせ、浮き屋根を作ることで親しみのある家を目指した。

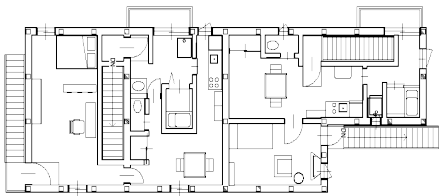
□プログラム

駅に向かう途中に道として通ることができる。南から建物に入ると店があり、通り抜けると、薪ストーブのある広場に出る。そこで食べ飲み、畳の間で一息つくことができる。広場を抜けると物作りをする土間があり、木に触れることができる。狭い道を通ると灰を活用してる焔に会うことができる。左手には住居があり、部屋をレンタルすることもできる。最後には小さな図書館があり、借りたりその場で読んで行くこともできる。

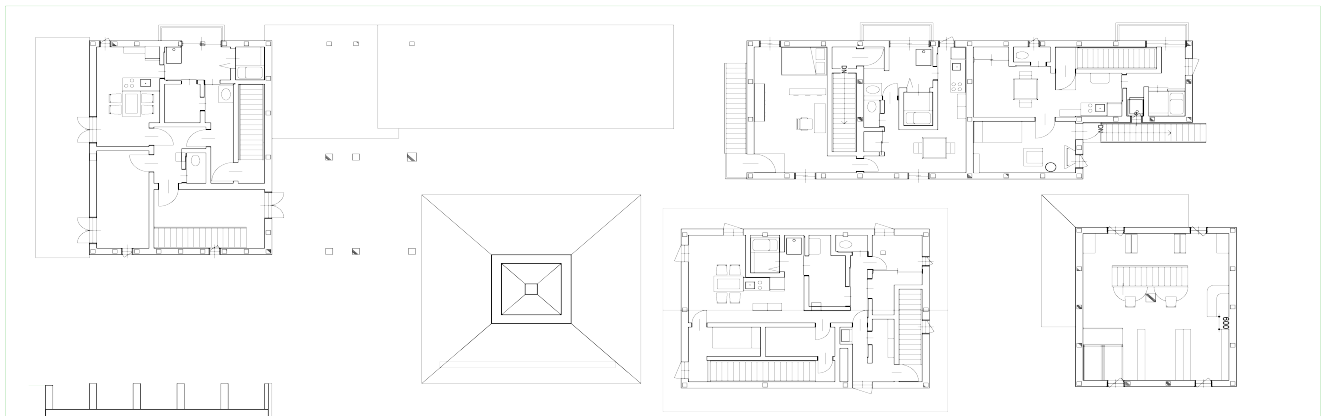


平面図 1階

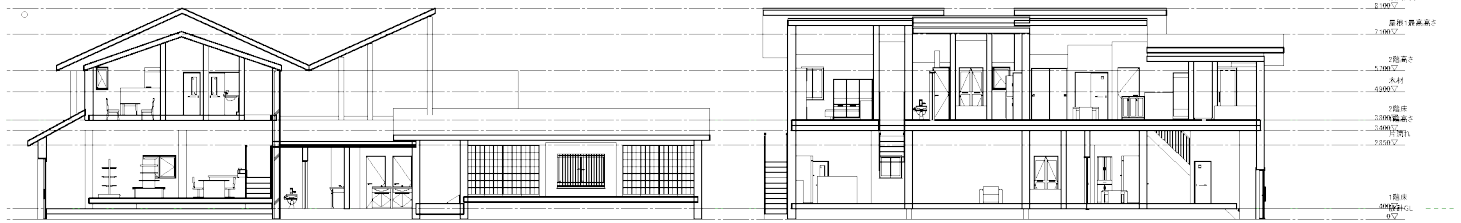
部屋ごとに借りる。



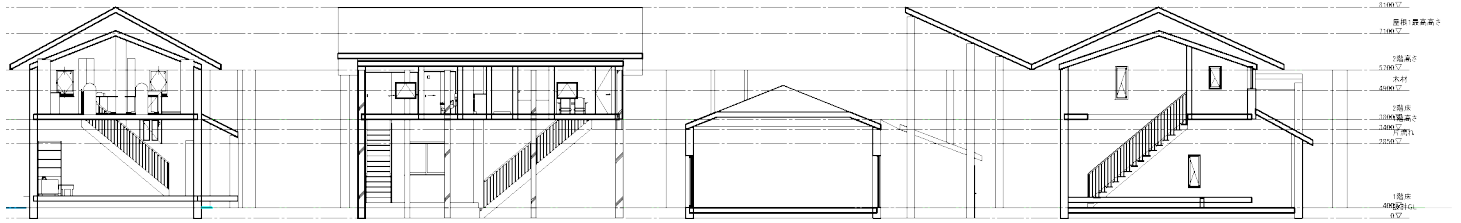
近年、少子高齢化が加速し賃貸需要が減ったかのように思えるが、ライフスタイルの変化により、単独世帯などの少人数世帯が増えている。理由としては、高齢化や晩婚化、生涯未婚率の高まり、離婚率の上昇などが挙げられる。また、都市部を中心に持ち家住宅率は減少傾向にあり、賃貸の需要は高まっていると言える。一方で、コロナ禍により、リモートワークが進み部屋が足りない傾向にある。また、少数世帯にとって他者とのコミュニケーションはとりづらいと感じた。そこで、部屋の数を選ぶことができる集合住宅を作ることによって、それぞれの目的や人数、ライフスタイルに合わせて家を選択し、長く住んでもらえ考えた。



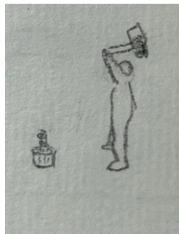
平面図 2階



断面図1 1/100



断面図2 1/100

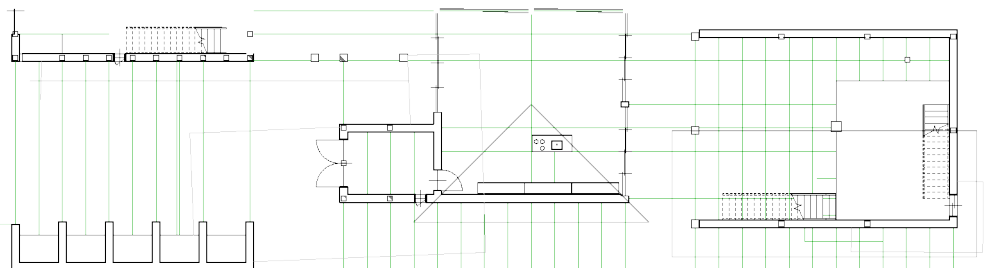


薪ストーブを囲う。

的に複雑にした。薪ストーブは、薪を割り1年以上乾燥させることでストーブに入れることができる。火をつけてからも家との気圧を気にしながら、薪をくべて火を大きくしている。その為、家族だけで薪ストーブを使うよりも、集合住宅で共有することで負担を減らしながら暖かい炎を見ることが出来る。また、薪ストーブは三度人をあたためると言われている。最初に、薪を割ることで体が温まり、ストーブの炎で暖まり、ストーブの上で料理をすることによって、食事に温まる。このように、ただエアコンのようにボタンですぐ暖まることはないが、多方面から人をあたため、癒すことができる。また、共有空間をあたためることで過ごしやすくなり、他者と話すきっかけになると考えた。炎が身近にあることでお茶を沸かしたり、スープを作る機会が増え、お礼に音楽を引いてもらったり、絵をかいてもらったりと他者から一緒に薪を作る人、一緒に食事を食べる人と自然にコミュニケーションをとるようになる。その繋がりは、人生を豊かにし、かけがえのないものになると考えた。

木を切り乾燥させる。

トラックから丸太を運び薪にする。切った薪を野外に乾燥させる。野外にさらすことで雨風で樹脂が流れ乾燥が早まる。その後土間の中で乾燥させることで効率的に乾燥させることができる。最後にストーブに入れ燃やす。この一連の流れを止めずにすることが出来る。



こしょくとは。

家族間では6つの「こしょく」が今増えてきている。「こしょく」というのは、孤食、個食、固食、粉食、小食、濃食のことを総称して呼ぶ。孤食は、家に一人でご飯を食べることを表す。

個食は、家族が家にいる状態でそれぞれご飯を食べることを表す。

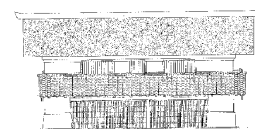
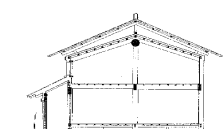
固食は、自分の好きな決まったものしか食べないことを表す。

粉食は、ピザやパンパスタ等の粉を用いた食を好んで食べることを表す。

小食は、少しの量しか食べないことを表す。ダイエットで量を減らすことも含まれる。

濃食は、加工食品等濃い味付けを好んで食べることを表す。

孤食は、家に一人でご飯を食べることを表す。



青梅の町屋 店蔵